

【再掲】
「ハイブリッド戦と超限戦」
ー今、『超限戦』を読み直すー

2022年2月24日に開始されたロシアによるウクライナへの軍事侵攻を契機としてロシアによる「ハイブリッド戦」について関心が高まっています。しかし、「ハイブリッド戦」は10年以上も前から議論の対象となっていたテーマであり、決して新しいものではありません。

そこで、『波涛』の著作権管理者である水交会の許可を得て、2010年に同紙に掲載された「ハイブリッド戦」に関する石原2佐（現 海幹校戦略研究室員）の投稿記事を、ここに再掲載します。

転載元：石原敬浩「「Hybrid Warfare と超限戦」ー今、『超限戦』を読み直すー」『波涛』第36巻第3号、2010年9月、68-72頁。

「Hybrid Warfare と超限戦」

— 今、『超限戦』を読み直す —

石原 敬浩 (海幹校第 1 教官室)

本記事は、海上自衛隊幹部学校における勉強会で実施されたものを掲載するものである。

はじめに

QDR(Quadrennial Defense Review)2010¹で示された“hybrid warfare”(ハイブリッド戦争)という概念をご存じでしょうか。ご存じの方の中で『超限戦』²という、やや古い本の内容を記憶されている方、その関連性に気づかれた方はいらっしゃると思います。

今回は、若手幹部を念頭に、今回の QDR2010 の脅威に関する話と、『超限戦』というおよそ 10 年前に一世を風靡した概念の関連性、そのキーワード“hybrid warfare”について、お話ししたいと思います。

1 QDR2010 と Hybrid Warfare

まずは、「4 年ごとの国防戦略見直し」QDRのお話からです。今回の QDR2010 の策定過程に関し中心的な役割を果たした、フロノイ国防次官が CSIS で講演し、策定過程の背景について説明しました³。検討は“hybrid warfare”及び“high end asymmetric threats”(高烈度非対称脅威)を念頭に、5 つの分野に分け、それぞれチームを編成し、合計 11 のシナリオを検討したとされています⁴。

生起公算、どのような事態が考えられるか、どう対処すべきか、具体的に検討するため、よく使用される

手法です。明らかになっているのは以下の分野別テーマです。

- Issue Team 1 : 非正規戦 ; イラク、アフガン、北朝鮮の体制崩壊、パキスタンの核兵器管理能力喪失
- Issue Team 2 : 大規模紛争 ; 中国 vs 台湾、ロシア vs バルト諸国、核武装したイラン
- Issue Team 3 : 国内外における民生機関支援 (国土防衛、民生支援、災害対策、サイバー攻撃)
- Issue Team 4 : 全世界的軍事プレゼンスの検討
- Issue Team 5 : 国防省内部の事業プロセスの効率化、効果改善

中台の紛争懸念が大規模紛争の可能性として、検討されていたことが、ここでの注目点です。では、このようなシナリオ分析から、実際の QDR ではどのような情勢認識が述べられたかと言うと、米軍が直面する作戦状況(operational landscape)の特徴として、以下の記述がなされています。

The term “hybrid” has recently been used to capture the seemingly increased complexity of war, the multiplicity of actors involved, and the blurring between traditional categories of conflict. While the existence of innovative adversaries is not new, today’s hybrid approaches demand that U.S. forces prepare for a range of conflicts. These may involve state adversaries that employ protracted forms of warfare, possibly using proxy forces to coerce and intimidate, or non-state actors using operational concepts and high-end capabilities traditionally associated with states.⁶ (太文字筆者)

「うううう・・・英語かあ、止めた」とここで読むのをあきらめた貴方!! そうです、君、これしきの英語で投げ出すようでは、21 世紀の海上自衛官は務まりません・・・

と、叱咤するだけでは、きっと諦めるでしょう。

¹ 米国法典第 10、118 条に基づき、国防長官が 4 年毎 (4 で割切れる次の年 : 大統領選挙の翌年) に、今後 20 年間を見据えて、国防戦略、兵力組成、近代化計画、インフラ、予算案その他の国防計画を策定、報告する。米国防省 HP <<http://www.defense.gov/defensereviews/>>2010.4.10 アクセス

² 喬良・王湘徳著、劉琦訳、『超限戦 21 世紀の「新しい戦争」』、(共同通信社、2001 年)

³ REBALANCING THE FORCE: MAJOR ISSUES FOR QDR 2010, CSIS, SPEAKER: MICHÈLE FLOURNOY, APRIL 27, 2009, [speeches/usdp/flournoy/2009/April_27_2009.pdf](http://speeches.usdp/flournoy/2009/April_27_2009.pdf)

⁴ 2010.4.10 アクセス なお、フロノイはクリントン政権期において、国防大学に勤務し QDR2001 準備作業を経験している。(統合参謀本部は、1999 年秋から QDR2001 の準備作業を開始) Michèle A. Flournoy, “Introduction: Twelve Strategy Decisions”, *QDR2001, Strategy-Driven Choices for America’s Security*, chapter 1 (Washington D.C.: National Defense University Press, 2001), pp10-22 Center for a New American Security (CNAS) biography of Michele Flournoy <<http://www.cnas.org/node/147>>2010.4.10 アクセス

⁵ Erin K. Fitzgerald and Anthony H. Cordesman, “THE 2010 QUADRENNIAL DEFENSE REVIEW A+, F, OR DEAD ON ARRIVAL?” Working Draft, August 27, 2009, CSIS, p27

なお、注 13 で後述する Andrew F. Krepinovich はゲーツ長官がフロノイ次官のチームとは別の、検証のための Red Team 編成に影響を与えた人物とされている。同 p28

⁶ 日本語訳は、金子将史、「「米国防見直し: QDR2010」を読む」、PHP Policy Review, Vol.4-No.23 2010.2.18、PHP 総合研究所、3 頁を参照、原文は Erin K. Fitzgerald and Anthony H. Cordesman, “THE 2010 QUADRENNIAL DEFENSE REVIEW A+, F, OR DEAD ON ARRIVAL?” , p27

⁷ QDR2010, p8

それでは、もったいないので QDR2010 をコンパクトに分析している日本語文献としては、インターネットで閲覧できる、金子将史氏の「『米国防見直し:QDR2010』を読む」がありますので、こちらをお勧めします。

この情勢認識の部分、金子氏の要約⁷によれば、

第1に、敵は米軍の優位を相殺するような手段を用いようとするため、国家であっても非通常兵器を使用したり、非国家主体が先進的な軍事技術を使用したりと、戦争がハイブリッドなものになってきている。

第2に、新興国や非国家主体の台頭等により、「グローバル・コモンズ」における安定が脅かされるようになってきている。具体的には、海外でのサイバー攻撃や国内でのネットワーク浸透、海賊、衛星破壊兵器、宇宙への進出、米国のパワー・プロジェクション能力の主たる手段（米国の基地や空海における資源やそれらを支えるネットワーク）を脅かすシステムへの投資といった現象が挙げられる。したがって、米国は、敵が、米国のパワー・プロジェクションを鈍らせ、拒否する「アクセス拒否能力 (anti-access capability)」を保有する事態に備える必要がある。グローバル・コモンズにおける優位性の維持は、今回の QDR の眼目の一つであり、直接の言及は抑え目であるが、その焦点は中国にあると考えられる。

第3に、変化する国際環境が近代国家システムに圧力を加え、脆弱な国家と結びついた挑戦の頻度や深刻さが増す。そうした国が急進主義の温床になり、それが核武装するといった可能性もある。今後数十年、紛争は、国家の強さと同様に国家の弱さから発生することになるだろうと、QDR2010 は展望する。

と、「Hybrid」を含め様々な問題点が指摘されています。

また、知らない人には珍しい（当然ですが）「anti-access capability」という言葉が登場します。プロシーディング⁸や Joint Force Quarterly(JFQ)⁹といった米軍雑誌を読んでいた人には「ははあーん」と来る表現ですが、中国や北朝鮮・イランといった国を意識した表現、対艦弾道ミサイルや巡航ミサイル、静粛な潜水艦、機雷等を駆使して、米軍のアクセスを拒否する能力として、これもまた近年、よく使われる表現です。

では、このような情勢認識で、米軍はどちらへ進も

うとしているのでしょうか。今回のテーマは脅威概念の説明と超限戦ですので、米軍の戦略分析は別の機会にすると、ゲーツ国防長官の狙い¹⁰を反映したと考えられる、「REBALANCING THE FORCE」から、関連部分だけを見てみましょう。

6つの重点的的使命“six key mission areas”¹¹の部分です。

- ・ Defend the United States and support civil authorities at home;
- ・ Succeed in counterinsurgency, stability, and counterterrorism operations;
- ・ Build the security capacity of partner states;
- ・ **Deter and defeat aggression in anti-access environments;** (太文字筆者)
- ・ Prevent proliferation and counter weapons of mass destruction; and
- ・ Operate effectively in cyberspace.

この“Anti-access”という状況に対抗するため、QDRでは統合空海戦闘概念(joint air-sea battle concept)の開発という事を述べています。

- ・ **Develop a joint air-sea battle concept.**

The Air Force and Navy together are developing a new joint air-sea battle concept for defeating adversaries across the range of military operations, including adversaries equipped with sophisticated anti-access and area denial capabilities. The concept will address how air and naval forces will integrate capabilities across all operational domains—air, sea, land, space, and cyberspace—to counter growing challenges to U.S. freedom of action. As it matures, the concept will also help guide the development of future capabilities needed for effective power projection operations.¹²

他にも様々な脅威分析や、対抗手段についての言及はあるのですが、ここまでで、今回のQDRではハイブリッドな脅威という考え方があり、敵対勢力が米軍のパワープロジェクション能力を封殺する、“anti-access”あるいは“anti-access and area

⁷ Ibid., pp5-9 金子「『米国防見直し: QDR2010』を読む」、3頁

⁸ PROCEEDINGS, U.S. NAVAL INSTITUTE, 会員になれば、ネットで過去記事検索も可、PDF版でも閲覧できるので必要なコピーには非常に便利

⁹ Joint Force Quarterly, National Defense University Press, インターネットで閲覧可能、比較的短くて読みやすい。

¹⁰ Robert M Gates, “A Balanced Strategy,” *Foreign Affairs*, January/February 2009. 「現在戦っている戦争での勝利」と「今後の不測の事態に備えること」のバランス等について説明しており、「バランス」が一つのキーワードと考えられる。

¹¹ QDR2010, p17

¹² QDR2010, p32

denial(A2/AD)¹³”といった能力を懸念し、対抗策を着々と開発中と言うことをご理解下さい。

でも、この“Hybrid”（決してプリウスの事ではありませんので「環境に優しい」等、勘違いしないで下さい。）ですが、なかなかの曲者です。

例えば、シンクタンク CSIS による QDR2010 の論評によれば、“hybrid warfare”の定義、概念整理が重要であると指摘する中で、その曖昧性の問題を挙げています。

The search for answers is being structured around the concept of “hybrid warfare” which requires the broadest possible range of force capabilities and flexibilities across the spectrum of operations. Hybrid warfare may be an intellectual improvement over the emphasis on conventional warfighting in past reviews, but so far the concept is so loosely defined, that it does not provide clear criteria for decision-making.¹⁴

ということで、次章では概念の経緯を含め、整理してみよう。

2 Hybrid Warfare とは

古くて新しい用語、一言で言えば、「正規・非正規手段・主体の混在した脅威、戦闘様相」とでも言えましょうか、まさしくハイブリッドなんです。（説明になってない?!）

“Hybrid Warfare”の唱道者¹⁵フランク・ホフマン氏の説明を中心に検討すると「多種多様な手段を使って、政治目的を達成する。そのために情報戦、心理戦を強く意識している。」とでも言えるでしょう¹⁶。また、先ほども引用したゲーツ国防長官の論文¹⁷でも同じよう

¹³ A2/ADとも略される事がある。例えばAndrew F.Krepinivich, Jr. “The Pentagon's Wasting Assets”, *Foreign Affairs*. New York: July/August 2009, p22 では “Chinese efforts are focused on developing and fielding what U.S. military analysts refer to as “anti-access/area-denial (A2/AD) capabilities.のように使用している。

Foreign Affairs.論文にも使用されている用語、QDRでも出現となれば、軍事専門家としては常識として知っておかねば・・・がんばれば若手幹部!!

¹⁴ Anthony H. Cordesman, Erin K. Fitzgerald, “The 2010 Quadrennial Defense Review, A+, F, or Dead on Arrival?”, CSIS, Sep8, 2009, <<http://csis.org/publication/2010-quadrennial-defense-review>>2010,4,10 アゲス

¹⁵ 記事中に「Hybrid Warfare—a term advocated by Frank Hoffman」と紹介されている。“DOD ZEROS IN KEY THEMES, QUESTIONS TO FRAME SWEEPING QDR”, *Inside the Navy*, 4/13/2009

¹⁶ Frank G. Hoffman, “Hybrid Warfare and Challenges”, *JFQ*/issue 52, 1st quarter 2009, p34

¹⁷ Gates, “A Balanced Strategy,”

な考え方が見え隠れしています。

「正規軍の戦場における勝利が戦争目的達成に直結する」といった古典的なものではない、というお話です。前回のQDR2006でも新たな脅威への対処¹⁸は述べられていましたが、“Hybrid”という用語は使用されていません。

でもここで、皆様は「昔からゲリラ戦や民衆の蜂起なんて手段はあったのではないかと疑問に思いませんか。

ホフマン氏はそのような反論に対して、Compound Wars（複合戦争）とHybrid Wars（混合戦争）¹⁹という概念を提示して説明しています。

簡単に言えば、Compound Warsとは「米国の独立戦争やナポレオン戦争におけるスペインのゲリラ戦、第一次世界大戦のアラビアのロレンスの活動のような、戦略レベルでの協調と相乗効果を発揮した多様な手段の組み合わせ、ただし、戦場は地理的に別」というものです。一方Hybrid Warsは「戦域・戦術レベルでの多種多様な戦い、同じ戦場に様々な手段、相手が存在する。」真に雑多な、こんがらがった状態、幸せに一家団欒でテレビを見ている家庭があるかと思えば、2ブロック先では戦闘が生起するといった、戦場と後方地域の区分も何もあったものじゃない、といった雰囲気です。

ホフマン氏の具体的な説明を見てみると、次の表現が見あたります。

Hybrid threats blend the lethality of state conflict with the fanatical and protracted fervor of irregular warfare. In such conflicts, future adversaries (states, state-sponsored groups, or self-funded actors) exploit access to modern military capabilities including encrypted command systems, man-portable surface-to-air missiles, and other modern lethal systems, as well as promote protracted insurgencies that employ ambushes, improvised explosive devices, and assassinations. This could include states blending high-tech capabilities such as antisatellite weapons with terrorism and cyber warfare directed against financial targets, as suggested by the pair of Chinese officers who wrote *Unrestricted Warfare*.²⁰

¹⁸ 詳細は拙稿「9. 11が米軍の脅威認識に与えた影響—米軍戦略文書の比較分析を中心として—(1)」、波瀾通巻200号、2009.1.を参照。4つの挑戦として、「伝統型」「不正規型」「破滅型」「妨害型」の脅威、それに応じたシフトを提言している。

¹⁹ Hoffman, “Hybrid Warfare and Challenges”, pp36-37、ここで使用した「混合戦」「複合戦」という言葉は一時的に筆者が使用するもので、確立された訳語は無い。

²⁰ Frank G. Hoffman, “Hybrid Threats: Reconceptualizing

そうなんです、ホフマンさんは、「非国家主体が、昔は国家でしか使用できなかったような兵器を使用して戦ったり、あるいは国家が金融市場を狙ったサイバー戦といった『超限戦』で示されている戦い」と概念を整理する説明の中で、『超限戦』を引用しているのです。

ここから、いよいよ本題です（長い前振りでした、すみません、ま、QDR2010 とハイブリッドがおぼろげに理解できたと言うことでお許し下さい。）

若い読者には馴染みがないかもしれませんが、1999年に中国で初版が出版された後、中国大陸はもとより、台湾、香港や海外中国人の間で広く読まれ、「超限戦」というネーミングが定着、米国でも注目を集めることとなり、特に9.11事件以後、予測的中したということでも更に話題となり、2001年12月に邦訳が出版されるに至った²¹、とされる本です。

3 『超限戦』を読み返す

超限戦が何故、当時話題になったかを、日本語版への序文から引用してみます。

2001年9月11日以後、私たちは数多くの電話を受けたが、一番多かったのは、「不幸にも予言が当たりましたね」という言葉だった。・・・新しいテロリズムは21世紀の初頭、人類社会の安全にとって主要な脅威となるだろう。その特徴は、戦術レベルの行動をもって当事国に戦略レベルの打撃を与え、震撼させることだ。・・・「彼らはその行動が秘密なために強い隠微性を持ち、行為が極端であるため広範囲の危害をもたらし・・・現代のメディアを通じリアルタイムに、連続的に、高視聴率で宣伝され、その恐怖の効果を大いに増幅する」という点を指摘した。・・・非職業軍人が、非通常兵器を使って、罪のない市民に対して、非軍事的意義を持つ戦場で、軍事領域の境界や限度を超えた戦争を行う一でやってきたのだ。これこそまさに「超限戦」なのである²²。

9.11以前から、限度を超えたテロを想定し、さらにメディアを通じた宣伝で、恐怖の効果を増大させることを予想していた、ということで注目されたのでした。

では、この本の中身はどういったものかと言いますと、全体は二部構成、第一部が新戦争論で戦争の性質変化を、第二部は新戦法論で戦争の方法・手段の変化

を論述しています。具体的には、訳者あとがきで要点を整理したところがあるので、そのまま引用します²³。

(1) グローバル化と技術の総合を特徴とする21世紀の戦争は、すべての境界と限度を超えた戦争で、これを超限戦と呼ぶ。このような戦争ではあらゆるものが手段となり、あらゆる領域が戦場となりうる。すべての兵器と技術が組み合わされ、戦争と非戦争、軍事と非軍事、軍人と非軍人という境界がなくなる。

(2) 全く新しい戦争の形態—「非軍事的戦争行動」が出現した。それは例えば、貿易戦争、金融戦争、新テロ戦争、生態戦争である。新しいテロリズムは21世紀の初頭において、人類社会の安全にとって主要な脅威となる。ビン・ラディン式のテロリズムの出現に示されるように、「いかなる国家の力であれ、それがどんなに強大でも、ルールのないゲームで優位を占めるのが難しい」。

(3) 一部の貧しい国や弱小国、および非国家的戦争の主体は自分自身より強大な敵、(大国の軍隊)に立ち向かうときは、一つの例外もなく非均衡、非対称の戦法を採用している。それは都市ゲリラ戦、テロ戦、宗教戦、持久戦、インターネット戦などの戦争様式で・・・往々にして効果が大きい。

(4) テロリストが自らの行動を爆破、誘拐、暗殺、ハイジャックといった伝統的なやり口に限定するなら、最も恐ろしい事態にはならない。本当に人々を恐怖に陥れるのは、テロリストとスーパー兵器になりうる各種のハイテクとの出会いだ。

“Hybrid Warfare”と比較し、「何時でも、何処でも、誰でも、何を使ってでも」的なニュアンスが類似であると感じられる説明です。

この本は、現役中国人民解放軍空軍大佐二人²⁴が書いたことでも注目されましたが、隣の大国、中国の発想の一端が伺えるとして、評価もされました。

今では古書としてしか購入できませんが、図書館やブックオフで見かけたら、一読、「即買い」をお勧めします。

何しろ、孫子の兵法の本家本元ですから、「兵とは詭道なり」という発想は、当然至極でしょう。(当然ですが、孫子は読んでますよねえ・・・)

ついでに言いますと、現代戦略の大家、コリン・グレイ先生は「もし、トゥキディデス、孫子、クラウゼヴィッツが語っていなければ、それはおそらく語る価

the Evolving Character of Modern Conflict”, *Strategic Forum*, Institute for National Strategic Studies, National Defense University, <<http://www.ndu.edu/inss>>, April 2009, p5

²¹ 喬良『超限戦』、282-283頁

²² 同上、1-2頁

²³ 同上、284-285頁

²⁴ 著者略歴によれば、「喬良：人民解放軍空軍政治部創作室副室長、空軍大佐、国家1級作家、王湘穂：広州軍区政治部勤務、空軍大佐」となっている。

値のないものなのだ」という大胆な格言を近著²⁵で述べていますが、発想の根本、孫子関連の本も多数出版されていますので、一読をどうぞ。

4 海の上では・・・

では、海上における“Hybrid Warfare”や超限戦ほどのような形態で私たちの前に現れるのでしょうか。

そう考えた、若手幹部は、将来有望です。問題意識、好奇心こそが成長の源ですから。

答えは、「不明」です。予測できないのが超限戦なのですから。・・・とは言いながら、ヒントが欲しいですよ。そこで私がお勧めするのは、「米軍はどのように考えているのだろうか」を参考にする、ということです。

米軍で、この種の脅威認識がいつ頃から高まってきたのかは明示されていませんが、例えば、米海軍(海兵隊、沿岸警備隊)の戦略文書、新海洋戦略“A Cooperative Strategy for 21st Century Seapower”においては、以下のように言及し、以前から懸念を示していました。

Conflicts are increasingly characterized by a hybrid blend of traditional and irregular tactics, decentralized planning and execution, and non-state actors using both simple and sophisticated technologies in innovative ways.²⁶

2007年の文書で、指摘されてたんですよ。用語としての“Hybrid Warfare”自体では、2002年の論文²⁷にも見られるもので、最近のものとはばかりは一概に言えません。

では、具体的に事態として、どのような形態での関わりになるんであろうか、というイメージは・・・というと、最初に述べた「“anti-access”あるいは“anti-access and area denial(A2/AD)”といった能力を懸念し、対抗策を検討中」というのが、重要なヒントであろうと思われます。

先にQDR2010での新たなコンセプトに関して述べましたが、空軍も含めたウォーゲームを実施した結果を踏まえ、新たな軍事戦略概念“AirSea Battle”の研究も進行中との報道(AIR FORCE Magazine)もあり

ました。

Pacific Air Forces has begun to forge a doctrine of AirSea Battle with the intent of deterring any Chinese, North Korean, or Russian military aggression in Asia and the Pacific. The doctrine is in its early stages of development, and initial findings are being drawn from a two-phase wargame called Pacific Vision, held in October.²⁸

また、QDR2010を分析した論文でも“QDRs have done a good job”と評し、A2/ADが意味するものは中国であり、QDRではその用語を冒頭に示し、それに対する姿勢を示した。また、そのため海軍の近接能力維持が重要である。そのため、“joint air-sea battle concept”とも称される海空軍協力を推進している²⁹、と評価しています。

この海空軍協力の新たなコンセプトが、米国が準備しつつある対抗策であり、我々が参考にするべき、一つのシナリオかもしれません。

その他、ここでは詳細な内容は述べませんが、中国問題に関しては、研究所やシンクタンク等から調査報告、論文等が出てますので、稿を改めてご紹介したいと思います。

おわりに

よく、論文や学会報告で目にするインプリケーション (Implication : 示唆するところ)、関西弁で言えば「それがどうした」の部分ですが、今回の“hybrid warfare”や『超限戦』といった、何でもありな脅威から言えることは、「荒唐無稽な事に備える準備」が必要である、ということでしょうか。特にこの種発想が極めて不得意な日本人にとっては努力が必要でしょう。

その為にも皆さん、本を読み、イメージーションを働かせ、自分の頭の中で立体的なシナリオ再生を試みましょう。

その中で、自分が果たす役割、不足するものが見えれば、貴方の進歩は格段にスピードアップ間違いなしです。御健闘をお祈りします。

(了)

²⁵ コリン・グレイ著、奥山真司訳『戦略の格言 — 戦略家のための40の議論—』、(芙蓉書房、2009年)、120-127頁

²⁶ James T. Conway, General, U.S. Marine Corps, Gary Roughead Admiral, U.S. Navy, Thad W. Allen Admiral, U.S. Coast Guard "A Cooperative Strategy for 21st Century Seapower", October 2007, p6

²⁷ William J. Neneth, "Future War and Chechnya: A Case of Hybrid Warfare", Naval Post Graduate School, June 2002

²⁸ Richard Halloran, "PACAF's "Vision" Thing, A new wargame tells airmen what it will take to hold the line in the Far East.", AIR FORCE Magazine 54 / January 2009, pp54-56

²⁹ Michael A McDevitt, "The 2010 QDR and Asia : messages for the region", Asia Pacific bulletin ; no.53, 11-Mar-2010, <<http://hdl.handle.net/10125/15255>>2010.4.11 アクセス